

青森県八戸市方言（若年層）の原因・理由表現

日高水穂

(1) はじめに

ここでは、青森県八戸市方言の原因・理由表現について報告する。調査項目は、「原因・理由表現 調査項目一覧」に掲載した全項目である。

青森県八戸市は、青森県の南東部に位置する太平洋に面した地域である。沿岸部には大規模な港が整備され、北東北屈指の水産都市、工業都市として、この地域の拠点となっている。人口は約25万人（2005年時点）である。

青森県の方言は、西側の津軽方言と東側の南部方言に分かれるが、八戸市方言は、長らくこの地域の中心地であったことから、南部方言の代表的な方言と言ってよい。原因・理由表現には、サカイ類のスケが用いられることに特徴がある。

(2) 調査の概要

話者は、青森県八戸市出身、1986年生まれ（調査時20歳）の女性である。大学進学により、現在は秋田市に在住している。発音・語彙は、全般的に標準語的であるが、文法形式については、当該方言の特徴的な形式をよく用いている。原因・理由表現に関しては、当該方言で使われるスケおよびカラ（有声化した場合「ガラ」となる）をよく用いるため、この調査に関しては適切な話者であると判断した。

調査時期は2007年1～2月である。

調査方法は、まず、話者自身に調査項目の方言訳を調査票に書き込んでもらい、それを見ながら、筆者が話者の出身地の方言で言う可能性のある別の表現などについて確認した。適切な方言訳が確定したのち、例文を読み上げてもらい、音声を録音した。以下の方言文は、この録音データの聞き取りに依っている。

この話者は、原因・理由表現として、スケとカラ（ガラ）を用いることから、調査では全項目について、それぞれを言うかどうかを確認した。その結果、カラはすべての調査項目について使用できるが、スケには以下の用法で使用できないという制限が見られた。

- ・原因・理由節の述語用法（XはYからだ）（1-6）
- ・推量表現ゴッタに後接する用法（1-7-2）
- ・「のだから」の終助詞的用法（2-2-5）
- ・接続詞の用法で「だから？」のように接続詞単独で問い返す用法（3-2-2）

- ・接続詞の用法で「あなたもわかっているはずなのに」という話し手の態度を表すもの (3-3)

スケはカラ (ガラ) に比べ、因果関係が不明確な用法では用いにくいものと考えられる。

(3) 文字化について

・方言文は、カタカナで表記する。この話者の発音は、ほぼ通常のカナ表記で表せる範囲のものである。語中尾のカ・タ行音が有声化する場合があるが、本来の濁音とは表記上区別せず、ともに濁点を付したカナを用いて表記する。

・文末の「？」は上昇音調を示す。疑問文であっても上昇音調を取らないものには「？」は付さない。

・当該方言の独特な表現には注を付す。ただし、東北方言で広く用いられる (よく知られた) 表現には注を付さないものもある。

・「×」を付した文 (形式) は、話者がその文 (その形式を含む文) が不自然であるとしたものである。

1 「から」と「ので」の用法

1-1 事態の原因 (接続調査を兼ねる)

以下に見られるように、事態の原因の用法では、スケ・カラ (ガラ) とともに用いることができる。いずれも、活用語の終止形に後接する。

1-1-1 マイニジ アメ フル {スケ/ガラ} センタグモノガ カワガネー。

1-1-2 マイニジ アメダ {スケ/ガラ} センタグモノ カワガネー。

1-1-3 テンキ イー {スケ/ガラ} センタグモノガ ヨグ カワグ。

1-1-4 コノ ヘヤワ シズガダ {スケ/ガラ} シゴトサ シューチュー デキル。

1-1-5 ユーベ オーアメ フッタ {スケ/ガラ} ジメンサ ミズタマリ デギデラ。

注:「デギデラ」は「できている」の意味。シテラ形は、「していた」に由来する形であるが、この方言では、存在動詞イルのタ形が現在時制を表し得るため、シテタ形に由来するシテラ形も現在時制を表す。

1-1-6 コドモダ {スケ/ガラ} ワガンネガッタ。

1-2 行為の理由 (後件のモダリティ制限の調査を兼ねる)

以下に見られるように、行為の理由の用法では、スケ・カラ (ガラ) とともに用いることができる。いずれも、後件の述語のモダリティ制限はない。

1-2-1 タイチャー ワリー {スケ/ガラ} シゴト ヤスムゴドニ シタ。

1-2-2 タイチャー ワリー {スケ/ガラ} キョー シゴド ヤスモー。

1-2-3 ヨミジワ クライ {スケ/ガラ} イッショニ カエルベ。

- 1-2-4 アカンボー ネデラ {スケ／ガラ} シズガニ シロジャ。
 1-2-5 アカンボー ネデラ {スケ／ガラ} シズガニ シテケネーベガ。
 1-2-6 アメフル {スケ／ガラ} カサ モッテゲ。

1-3 判断の根拠

以下に見られるように、判断の根拠の用法では、スケ・カラ（ガラ）ともに用いることができる。

- 1-3-1a ホシガ {デデルスケ／デデラガラ} アシタモ イー テンキニ ナルゴッタ。
 注：「ナルゴッタ」のゴッタは「だろう」の意味の推量形式。この方言では、推量形式としてゴッタとベがあるが、この話者はゴッタをよく用いるとのこと。
 1-3-1b A「アシタモ イー テンキニ ナルゴッタ。」
 B「ナシテ ワガンノ？」
 A「ホシ {デデルスケ／デデラガラ}。」

- 1-3-2 ヒダリテクスリユビサ ユビワ {ハメデッスケ／ハメデラガラ} ケッコンシテル。
 注：ル語尾の動詞にスケが後接する場合、「ル」の発音が弱化する場合がある。「ハメデッスケ」は「ハメデルスケ」にあたるものである。なお、1-3-1a・bの「デデルスケ」と「デデラガラ」のように、この話者には、「している」相当の形式のうち、スケにはシテル形、カラ（ガラ）にはシテラ形が前接する傾向が見られる。

- 1-3-3 セギ デルシ ネズッポイ {スケ／ガラ} カゼ ヒーダガモシンネ。
 1-3-4 サッキ シンブンハイタズノ オド シタ {スケ／ガラ} ゴジ スギタンダゴッタ。

1-4 発言・態度の根拠

以下に見られるように、行為の理由の用法では、スケ・カラ（ガラ）ともに用いることができる。

- 1-4-1 アブネー {スケ／ガラ} コノ カワデワ アソブナ。
 1-4-2 カゼ ヒゲバ ワガンネー {スケ／ガラ} アズギ シテ イゲ。
 1-4-3 キョーノ シゴトワ ゼンブ オワッタ {スケ／ガラ} ハー カエロー。

1-5 理由を表さない用法

以下に見られるように、理由を表さない用法では、スケ・カラ（ガラ）ともに用いることができる。

- 1-5-1 スグ モドッテ {クッスケ／クルガラ} ココデ マッテデケデ。
 注：ル語尾の動詞にスケが後接する場合、「ル」の発音が弱化する場合がある。「クッスケ」は「クル

スケ」にあたるものである。

1-5-2 イチドデ イー {スケ／ガラ} ピラミッドサ ノボツテミテ。

1-5-3 オネガイダ {スケ／ガラ} カネ カシテケデ。

1-5-4 クルマ ヨンデ {ケッスケ／ケルガラ} スグ ビョーインサ イゲ。

注：ル語尾の動詞にスケが後接する場合、「ル」の発音が弱化する場合がある。「ケッスケ」は「ケルスケ」にあたるものである。

1-5-5 ツグエノ ウエサ オイデ {アッスケ／アルガラ} アダシノ サイフ モツテキテケネーベガ。

注：ル語尾の動詞にスケが後接する場合、「ル」の発音が弱化する場合がある。「アッスケ」は「アルスケ」にあたるものである。「モツテキテケネーベガ」は、「持ってきてくれないだろうか」の意味。このような疑問文で用いられる推量表現には、ゴッタを用いることはできず、ベを用いる。

1-6 原因・理由節の述語用法（XはYからだ）

以下に見られるように、原因・理由節の述語用法では、カラ（ガラ）は用いることができるが、スケは用いることができない。

1-6-1 A 「キブン ワリー。」

B 「アッタラサ ノム {×スケ／ガラ} ダジャ。」

1-6-2 A 「キョーワ デパート コンデラナ。」

B 「ニジョービダ {×スケ／ガラ} ダベナ。」

1-6-3 A 「サイキン タローノ キゲンガ ワリーンダ。」

B 「オメーガ ジローノ ゴドバリ ホメル {×スケ／ガラ} デネーノ？」

1-6-4 A 「サイキン タローノ キゲンガ ワリーンダ。」

B 「ワタシガ ジローノ ゴドバリ ホメル {×スケ／ガラ} ダベガ。」

1-6-5 A 「サイキン タローノ キゲンガ ワリーンダ。」

B 「ジローバリ ホメラレル {×スケ／ガラ} ガモシレネーナ。」

1-6-6 A 「ヒッコシノアト パソコンノ チョーシガ ワリーンダ。」

B 「ソレワ ハゴブドギニ オドシタ {×スケ／ガラ} ダッキヤ。」

1-7 従属節内のモダリティ表現

1-7-1 伝聞・推定表現など

以下に見られるように、伝聞の（シ）ソーダ、推定のみテータ、可能性判断のカモシレネー（ガモシレネー）には、スケ・カラ（ガラ）ともに後接することができる。

1-7-1-1 コンヤワ アメ フルソーダ {スケ／ガラ} ハヤメニ カエロー。

1-7-1-2 コンヤワ アメガ フルミテータ {スケ／ガラ} ハヤメニ カエロー。

1-7-1-3 コンヤワ アメ フリソーダ {スケ／ガラ} ハヤメニ カエロー。

- 1-7-1-4 ドーモ ネズ アルミテータ {スケ/ガラ} ハヤメニ カエルゴドニシタ。
1-7-1-5 アメ フルガモシレネー {スケ/ガラ} カサ モッテキタ。

1-7-2 推量表現

以下に見られるように、推量のゴッタには、カラ（ガラ）は後接することができるが、スケは後接することができない。

- 1-7-2-1 アメ フルゴッタ {×スケ/ガラ} カサ モッテゲ。
1-7-2-2 ヤマデワ カナリ ユギ フッタゴッタ {×スケ/ガラ} ナダレガ シンパイダ。
1-7-2-3 タイシタ アメニワ ナラナイゴッタ {×スケ/ガラ} カサー モッテイガネ。
1-7-2-4 ソドワ サムイゴッタ {×スケ/ガラ} アズギシテ デガゲヨー。
1-7-2-5 コノブンダバ アシタモ アメダゴッタ {×スケ/ガラ} エンソクワ チューシニ ナルベナ。

1-7-3 丁寧表現

この話者の場合、丁寧表現を用いると文全体が標準語のスタイルになり、ノデを用いた以下のような表現が回答された。

- 1-7-3-1 チョット ハナシガ アリマスノデ ココニ キテクダサイ。
1-7-3-2 キケンデスノデ カケコミジョーシャワ ヤメマショー。
1-7-3-3 クニノ リョーシंगा タズネテキテイマスノデ キョーワ スコシ ハヤメニ カエラセテ イタダイテモ ヨロシーデスカ。

1-8 文末用法

1-8-1 倒置

以下に見られるように、倒置の用法では、スケ・カラ（ガラ）ともに用いることができる。

- 1-8-1-1 コゴデ チョット マッテデ。スグ モドッテ {クッスケ/クルガラ}。

注：ル語尾の動詞にスケが後接する場合、「ル」の発音が弱化する場合がある。「クッスケ」は「クルスケ」にあたるものである。

- 1-8-1-2 チョット ゴセンエン カシテ。ゲツマズマデニ カエス {スケ/ガラ}。

- 1-8-1-3 エキマデ ムカエニキテ。シチジニ ツグ {スケ/ガラ}。

1-8-2 終助詞的用法

以下に見られるように、終助詞的用法では、スケ・カラ（ガラ）ともに用いることができる。

1-8-2-1 アドデ モー イチド デンワスル {スケ/ガラ}。

1-8-2-2 チョット デガゲデクルケド オヤツ プリンガ レイゾーコサ {ハイッテッ
スケ/ハイッテラガラ}。

1-8-2-3 アンダノ ゴド ケッシテ ワスレネー {スケ/ガラ}。

1-8-2-4 オトーサンニ イーツケテ {ヤッスケ/ヤルガラ}。

注：ル語尾の動詞にスケが後接する場合、「ル」の発音が弱化する場合がある。「ヤッスケ」は「ヤル
スケ」にあたるものである。

1-8-2-5 ゴジマデ エキマエノ キッサテンサ {イッスケ/イルガラ}。

注：ル語尾の動詞にスケが後接する場合、「ル」の発音が弱化する場合がある。「イッスケ」は「イル
スケ」にあたるものである。

1-8-2-6 チョット スーパーサ カイモノニ イッテ {クッスケ/クルガラ}。

注：ル語尾の動詞にスケが後接する場合、「ル」の発音が弱化する場合がある。「クッスケ」は「クル
スケ」にあたるものである。

1-8-2-7 ヒミツオ バラシタラ タダジャ オガネー {スケ/ガラ}。

2 「のだから」の用法

2-1 「から(ので)」との相違

「から」に相当するスケ・カラ(ガラ)に対し、「のだから」に相当するのはンダスケ・
ンダガラである。これらの使い分けは、「から」と「のだから」と同様のものである。

2-1-1a ジカンネー {スケ/ガラ/×ンダスケ/×ンダガラ} イソイダ。

b ジカンネー {スケ/ガラ/ンダスケ/ンダガラ} イソグガー。

c ジカンネー {スケ/ガラ/ンダスケ/ンダガラ} イソゲジャ。

2-1-2 テンキ イー {スケ/ガラ/×ンダスケ/×ンダガラ} サンポニ デガゲダ。

2-1-3 マイニジ アメ {フッスケ/フルガラ/×フルンダスケ/×フルンダガラ} セ
ンタグモノ カワガネージャ。

2-1-4 ユーベ オーアメ フッタ {スケ/ガラ/×ンダスケ/×ンダガラ} ジメンサ
ミズタマリ デギデラ。

2-2 意味・用法(接続調査を兼ねる)

2-2-1 確かな事実とその当然の結論

2-2-1-1 コッタラサ ガンバッタ {×スケ/×ガラ/ンダスケ/ンダガラ} コンドワ
ウマグ イグハズダ。

2-2-1-2 ダイジナ ハナシ {シテッスケ/シテラガラ/シテンダスケ/シテンダガラ}
コドモワ アッチサ イゲジャ。

注：この調査項目では、スケ・カラ(ガラ)も使用可能とのことであった。なお、ル語尾の動詞にス

ケが後接する場合、「ル」の発音が弱化する場合があります、「シテッスケ」は「シテルスケ」にあたる。1-3-1a・bの「デデルスケ」と「デデラガラ」のように、この話者には、「している」相当の形式のうち、スケにはシテル形、カラ（ガラ）にはシテラ形が前接する傾向が見られる。

2-2-1-3 コッチワ シンケン {×ダスケ/×ダガラ/ナンドスケ/ナンドガラ} カラガ
ワネーデケデ。

2-2-2 聞き手に関する情報－行動要求・認識要求

2-2-2-1 ワゲー {×スケ/×ガラ/ンダスケ/ンダガラ} イチドヤ ニドノ シッパイ
デ クヨクヨ スルナジャ。

2-2-2-2 ジュケンセー {×ダスケ/×ダガラ/ナンドスケ/ナンドガラ} モット シン
ケンニ ベンキョー セージャ。

2-2-2-3 セッカグ リューガグスル {×スケ/×ガラ/ンダスケ/ンダガラ} チヤント
ベンキョー シテコイヨ。

2-2-3 後件が聞き手の利益になる事柄の場合

2-2-3-1 ジカンワ マダ ジューブンアンダ {スケ/ガラ} ユックリ シテ イッテケ
デ。

2-2-3-2 チャンスワ マダ アンダ {スケ/ガラ} ゲンキ ダセジャ。

2-2-3-3 モージキ タイイン デギンダ {スケ/ガラ} アド スコシノ シンボーダッ
キヤ。

2-2-4 倒置

「のだから」の倒置用法では、ンダスケ・ンダガラともに用いることができる。

2-2-4-1 カラダサ キーツケロヨ。ハー ワガグネーンダ {スケ/ガラ}。

2-2-4-2 ジブンデ キメロジャ。ハー コドモジャネンダ {スケ/ガラ}。

2-2-4-3 ソリヤ シンパイ スルベー。オヤナンダ {スケ/ガラ}。

2-2-5 終助詞的用法

「のだから」の終助詞的用法では、ンダガラは用いることができるが、ンダスケは用いることができない。

2-2-5-1 ワダシ ゼツタイニ カレト ケッコンスンダ {×スケ/ガラ}。

2-2-5-2 コッチガ アメー カオ スルト スグ チョーシニ ノンダ {×スケ/ガラ}。

2-2-5-3 アノ オドゴド キタラ マッタグ サゲグセ ワリーンダ {×スケ/ガラ}。

3 接続詞「だから」の用法

3-1 接続助詞「から」の文に言い換えられ、前件・後件が同一の話し手によるもの

接続詞「だから」にあたる形には、ダスケ・ダガラがある。接続助詞「から」の文に言い換えられ、前件・後件が同一の話し手による用法では、ダスケ・ダガラともに用いられる。

3-1-1 サイキン マイニチ アメダジャ。{ダスケ/ダガラ} センタグモノガ カワガネージャ。

3-1-2 ハー イエ デル ジカンノ サンジュップンマエダジャ。{ダスケ/ダガラ} ハヤグ オギロジャ。

3-1-3 スグ モドツテクル。{ダガラ/ダスケ} コゴデ マツテデケデ。

3-2 接続助詞「から」の文に言い換えられ、前件・後件の間に話者交替があるもの

3-2-1 相手の発話中の事態Pを受け、それから導かれる帰結Qを述べるもの

接続助詞「から」の文に言い換えられ、前件・後件の間に話者交替がある用法で、相手の発話中の事態Pを受け、それから導かれる帰結Qを述べる場合は、ダスケ（ンダスケ）・ダガラはともに用いることができる。

3-2-1-1 A 「サイギンワ マイニジ アメ フルネ。」

B 「ンダッキャ。「{ンダスケ/ダガラ} センタグモノガ カワガネクテ コマルジャ。」

3-2-1-2 A 「キョー アメ フルズ。」

B 「{ダスケ/ダガラ} カサ モツテゲ。」

3-2-2 聞き手に結論を求めるもの

聞き手に結論を求める用法のうち、B 3のような接続詞単独で問い返す場合には、ダガラを用いることはできるが、ダスケを用いることはできない。

3-2-2-1 A 「タイヘンダジャ。 アメ フツテキタジャ。」

B 1 「{ダスケ/ダガラ} ナンダズノ？」

B 2 「{ダスケ/ダガラ} ナンナノ？」

B 3 「{×ダスケ/ダガラ} ?」

3-2-3 相手の発話中の事態や発話時の状況Pが、既知の事態Qの原因・理由であると認定するもの

この用法では、ダスケ・ダガラともに用いることができる。

3-2-3-1 A 「ジコデ デンシャガ オクレデルンダズ。」

B 「ンダノ。{ダスケ/ダガラ} ミンナ マダ コネーнда。」

3-2-3-2 コレダ {スケ/ガラ} レンキューニ デガゲンノ イヤナンダジャ。

3-2-3-3 アレダ {スケ／ガラ} レンキューニ デガゲンノワ イヤナンダジャ。

3-2-4 相手の発話中の事態や発話時の状況Pが、既に行った発話行為Qの理由であると認定するもの。

この用法では、ダスケ・ダガラともに用いることができる。

3-2-4-1a {ダスケ／ダガラ} ヤメドゲッテ イッタナンダジャ。

b {ダスケ／ダガラ} ヤメドゲッテ イッタベナ。

c {ダスケ／ダガラ} ヤメドゲッテ イッタッキヤ。

3-2-4-2 {ダスケ／ダガラ} スルナッテ イッタッキヤ。

3-3 接続助詞「から」の文に言い換えられず、「あなたもわかっているはずなのに」という話し手の態度を表すもの

3-3-1 「あなたが…と言うから私は～と言う」という発話行為間の因果関係があるもの

この用法では、ダガラを用いることはできるが、ダスケを用いることはできない。

3-3-1-1 A 「サッキ タノンダ シゴド チャント ヤレヨ。」

B 「ウン キョージュニ {ヤッスケー／ヤルガラー}。イマ チョット
イソガシクテ デギネンダ。」

A 「アシタマデニ ヤレヨ。」

B 「{×ダスケ／ダガラ} キョージュニ ヤルッテ イッテルッキヤ。」

3-3-1-2 A 「キョーワ オネガイガ アッテ キタンダ。」

B 「ナニ？ ハナシテミデ。」

A 「スゲー ダイジナ ゴドナンダ。」

B 1 「{×ダスケ／ダガラ} ハナシテミロジャ。」

B 2 「{×ダスケ／ダガラ} ハナシテミロッテ イッテルッキヤ。」

3-3-2 発話行為間の因果関係がないもの

この用法では、ダガラを用いることはできるが、ダスケを用いることはできない。

3-3-2-1 A 「サッキ タノンダ シゴド ヤッテクレタ？」

B 「エ？ ナンノゴド？」

A 「{×ダスケ／ダガラ} ゴゼンチューニ タノンダ アノ シゴドダジャ。」

3-3-2-2 A 「キョー チョード タナカサンサ アッタヨ。」

B 「ドノ タナガサン？」

A 「{×ダスケ／ダガラ} キノー ハナシテラッタ サンチョーメノ タナガ
サンダジャ。」